



の 辭

人類生活の斷斷なき進展は、爾果まことに密なる連鎖のうち成就せられゆくものであつて、そこには更めて新と舊との間に、毫末も有りえぬわけであらう。しかも果位に約して大觀すれば、人類生活の全局面に一新の時機あるを否定しえない。かかる意味において、今次戦争の終結とともに、全人類の行進は、いよいよそのならぬ世界史上の一新時代が開け始めたと言はねばならぬ。しかし、それはまさに開け始めたに過ぎないのであり、これに確たる生活内容と構造とを附與することによつてこの世界史的新時代の實質面を構築するの作業は、これを今日以後に期さねばならぬのである。現下、全世界の異常の緊張と努力とは、實にこの新時代の實質面建設の一事に集中せられてゐると見られるのであり、我國復興の成否なるものもまた、よく我國がこの世界史的新課題解決の能動的一翼たるの任務を擔當しうや否やに係つてゐると言つてよからう。

内外の形勢と課題正にかくの如くであるとするれば、われら學問研究に従事せる者が新なる覺悟と志念との下に、學問研鑽の本領を發揮せんと努めるのは、もとより當然の心情であり、且又その責務でもあるであらう。蓋し、研學の本領なるものは、生命事象に對する、古と今とを貫き日本と世界とに涉るところの、深くして靜かなる客觀的省察の

うちに成り立つものであらうが、かかる省察を通じてこそ卑近の便宜方策に墮することなき民族生活再建のための眞軌道が発見せられうるばかりではなく、事の眞實に徹せずんば止まざる省察の實踐そのものが、すでにその儘民族再生の新なる姿に外ならぬのであり、又新時代形成への參與そのものを直接に意味する、と考へられるが故である。

われらここに顧みるところあり、小にしては一橋同人の學問攻究に利便を供せんがため、大にしては我國學問研究の新なる發足に寄與せんがため、時勢に伴ふ大小の困難を排除しつつ、本誌の再刊を企圖するに至つた。冀くはこの小誌、よく志すところを達成せんことを。